

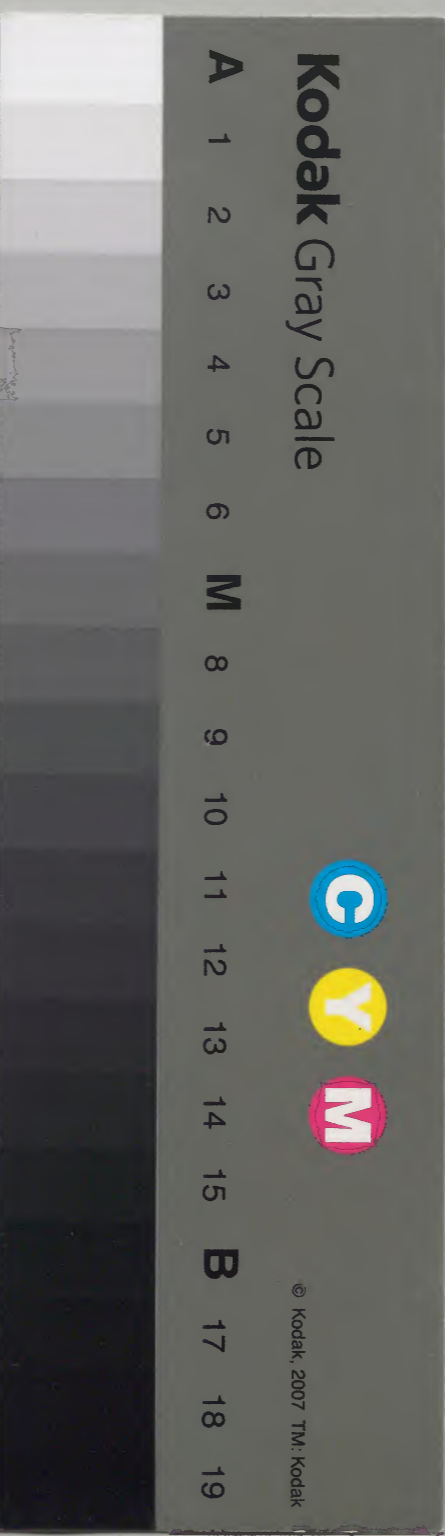
慶元年記

此層慶長元和小説ト全同書也ト  
 且小説モ慶長記板下等諸書ヲ  
 之元者トハ断然不採用書トスレ

内閣文庫	
番號	和 35299
冊數	6 ( 1 )
函號	150 71

庫文閣内	
一五 函架	三五 二九 九號
大冊	和書類

共六

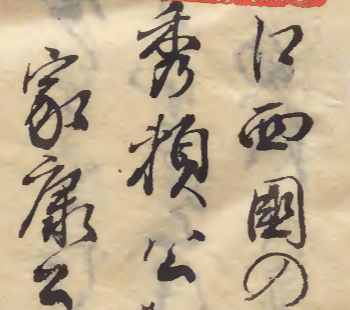


此書、卷一ハ慶長年中記板坂ト齋ニシテ卷二以下ハ慶長  
元和寛永小説ナリ二書並ニ早行ノ書アリ

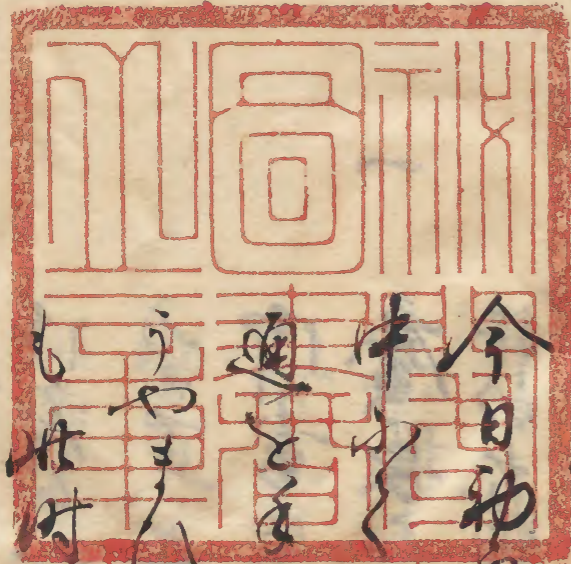
慶長年中記ハ三年ニ起リ五年ニ終リ慶長元和寛永  
小説ハ慶長六年ニ起リ寛永四年ニ終ル自ラ別棟ナリ  
小説ハ慶長年中記ヲ綴輯セシモノニアラス



慶長二年七月  
侍  
所遣



西國の侍、伏見東國の  
秀頼公とてしるすて下り  
家康公一法大老にあり  
所世討日本の法大老  
家康公



今日初  
増田右衛門徳右衛門使  
所意の  
通  
人  
の  
奉  
行  
の  
奉  
行  
の  
奉  
行

り  
振舞  
出酒  
宴  
京  
膳  
義  
任  
政  
宗  
三  
人  
の

雜史

引馬文庫

申ふがしむ此日あり 秀忠去はるる  
は度一日間と云いて加賀中納利家  
の身一右の元はつまり具社上巻と記述  
申書い事

一 慶長三年正月十九日夕 家康を以て  
治部補五ヶ月中 申治はく俄の事  
なれど所為補のすむく小村本石指り  
ゆく縄しけの危くとも事今やく  
いふは此時大和を以て後中納補  
うらふていふかごの働はくとも家一火と

かけらも特の下山く果はく人の口勝るる  
来家一火くりにありあふく城の火は  
度不治少腰とりと下知せらる  
家康うらのもの降来人と名乗る事あり  
申すの極きまの事なれども御事  
其付あ人のうらき人ふあもたうは少き  
殺し申す中定人の人其夜もことけ  
翌日より世の御事なれり事なれり  
けし申す申すの表不長危と造り事なれり  
表と垣築化しとく月小長危とて此後

むさしに於て一家人ももせり後夜のみ  
井伊兵部少輔殿へきりりつとつて居りし中  
築さしりの山と三日ぶりの事い此所の事

一 慶長四年正月十九日の夜 家康より

一 右 治部殿に少少責入に申し治部出  
俄の路動御一さのすましく小村木より集  
をくつ由一屋中あくと旨お果て  
いりもせりか 翌日山を何のさ  
か一其外伏見申後六地藏沖に  
町小人数もたけらけり

浦へもせり入るも後詰り

このおと実東へきりりつとつて居りし中

日取つてこの山と三日ぶりの事い此所の事

やしりりり三日ぶりの事い此所の事

本多中務井伊兵部少輔 柳原或義少輔 半岩半次

石川左衛門守 牧野右馬允 本多氏後守 島村元兵衛

如多信成守 渡地元酒井元信 渡辺守元 水野

元道 松平和泉守 酒井元直 大村内 後量元守

加茂守助 安茂 斎藤成清 吉田 日守 齋藤 戸田

三浦 齋藤 久野 氏親 少輔 渡辺 津島 大首 松平 大首

松平石見守使書 近來友の物横田基甚山家又市  
小栗忠藏戸田又信清山家宗家河野景隆山家宗原  
米倉齊寛の米津清定此外大久保清定の西尾  
小丸清阿部清定 矢代誠中守三枝宗定城藏経  
永井右近牧野宗定 山口宗清山家勤定山家  
氏弘少輔戸田九門三宅清次清一人當可者  
才計和如之ら建次依見後數小家中人較り  
大昔氏物使書六地産油二馬也一産  
のうら長尾一人敷口五人也一門用心  
家原と退治一敵小の五人可御也

屋一三小の産りも用可一く生駒雅楽氏  
入の堀尾常功中村或部少輔日一宗と天下の  
の仕置の候命の使とす一此付の日本國中  
福あり一は主人の家を江戸 門倉加賀中洲若  
安藤中洲と倉津中洲と備前中洲と連判  
一此一淺井深正増田左馬尉石田治政痛徳右  
院長米大倉を捕一人と奉り一連判此家元  
一人奉り一人の状法則一此の家を連判一内  
澄系判とを致り一此節朝鮮人此日一  
一徳永法中と肥前國一此小の主人の家元

一人の奉公の地有り 各領朝鮮ふを去るに  
 人元日中へを帰しに加茂外氏小西掃部  
 黒田甲斐守清忠大元守加茂大馬作藤原中務補  
 増原安河守守友雲代渡守福原右馬助高深若  
 木守

一 雅樂常刀或敏守年一三十四歳年一三十一歳  
 向一白古城へ移移一領中二月一先  
 一白古城の記事

一 豊後指水のくしほりち中一白とは川  
 のくしに柳原或敏人元小倉とけ西のくし

ほりちり小倉くしくし一門無本元塚の  
 けりくし一白原くし豊後指し古蔵入  
 大元の口の水の方一柳原中勢井伴兵部  
 家とつくし家来のものん

一 古城の家元とて同 家元とて中一に  
 けりちり一白原くし夜中一政地口一門林  
 と家元といふにかりあくしき一白河原  
 きり一河端まきくし一坂あく坂の下半坂も  
 三十間平地六松多針一河のくし一ありきき行  
 町りり一白原くし一白河のくし一白河くし

江戸所と中野の三つみのもては小濱と吉野  
と中野大将兵隊に其新井より小畑ねん亮一  
むいしー久蛇、あいらねい一伊休小兵  
小姓三人、五人小者三派むう一むいお城  
小中のゆい小書院もあふも中野さき  
中野さき一伊休りあき一むいお城の月さき  
あきさああきとあきさきさき小姓流も  
新井ゆい目つき合ひよあき中野武人  
あきも伊休つあき一むいお城十日さき  
一夜向一むいお城さき小書院さきもさき

家系公起一くそのとあきさきさきあき  
あきお城さきさき一のさきさきさきあき  
さきさきさき武略の二達者あきさき  
伊休事お城さきさき大少若一お城さき  
人の通うたあきさきお城一三河さきお城  
お城さきさきお城さき一施業院お城さき  
お城のあきさき一お城さきお城さきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさき  
所用のさきさきさきさきさきさきさき  
お城さきさきさきさきさきさきさき



中

加茂主計

黒田甲斐守

細川敏中

服部中務

加茂左馬助

福信左衛門

浅井左衛門

右の前達とてせうせうの勤忠とてはよく  
はやくさるる名はしりし 何れともうら

下らたをみと仕はしつはくもめを非と

事と申 家康と申作は治部少輔は徳

宗ふつは政見ふつあつて天下の事

うらふと申 勇将は秀吉と申世の

事の上は事 徳成はとん秀吉と知若く

は得し天下のはとくふつとぬとねと

わい少く名もしつはくはの徳忠この時

治部少輔と申後つて喜らつては治部少

輔と申はとん大雨少くは治部少輔は

以黒田甲斐守あ人多勢に治部少輔

のふ子孫を在て申是なり作のらつて

く道少くも治部少輔と申は徳と申

はとんあつては治部少輔と申は徳と

はとんあつては治部少輔と申は徳と

はとんあつては治部少輔と申は徳と

はとんあつては治部少輔と申は徳と

一川退く道中者えり佐和山人数之  
五人(濃田)一むと一濃田少く一三河少敷  
たくら坊いしんを伴い三河少敷いりあも人  
少くけ送す濃田少く暇乞ふ時少敷  
刀と進とされ三河少敷も一花服一  
一沼原少敷進す古刀少敷時越後少敷  
少敷里佐和山一川退謀及の少敷の  
事うまはつと後日志す

一ひふ一むよ少敷少くはいり佐見れ城  
鳴りく少敷一河移少敷三奉少敷志すりに

少敷の六谷刑部少敷内少敷の使すも少敷雅少敷  
常刀或は少敷表の使す城一河合志す月音使  
城一河少敷少敷少敷少敷少敷少敷少敷  
外の元少敷少敷少敷少敷少敷少敷少敷  
長刀一少敷少敷少敷少敷少敷少敷少敷  
少敷少敷少敷少敷少敷少敷少敷少敷  
佐見一少敷少敷少敷少敷少敷少敷少敷  
河目と少敷少敷少敷少敷少敷少敷少敷  
出い

一佐見少敷山河城出口元少敷少敷少敷少敷少敷

川のすまゝに淺形深正長米大花水松の丸出口  
徳台院南東増田右邊の村に名常普二の丸  
所門書抄取立此丸城尾常刀田中名松原  
賀河波も小野木總殿助去方河内もけりこの丸  
十六日朝、小野者はとむらわ丸少とさして普  
元も不入此口少く城陣もあらず

一  
治部が補佐知山と退り以後 家康と徳川  
城より進み柴田丸進みと進みは佐和山下の  
徳川と家康と史た近小御合の家陣と普者  
家とつらつら水りといふ一後治部が補

和米抄を成さくゆ出さず亦苗とりしせ  
あつちの少く振舞と出さず城より  
ゆいせらるゝのしるしは後治りいよさす  
主少りせ疎布りし翌日左近と目の出り  
佐和山と出さずと致り又一治部が補暇乞ふ  
まじらば對候と治部が補は後候いとく  
表へは出いと門送とし一時是は治りより  
のまじけりゆつけきせんと志あみはけりみ  
責まわれむといふと入りけりしは  
治部が補つらつら水りといふ一後治部が補

小神女のよきおーらの暇さし一り  
百廿と折紙りり時迄を百廿の暇さしも  
中待小神女のおやあはもかき時迄をり  
の百廿も南時あもりもし免あぶく  
奈の係折紙折あし事一池の中稀なり  
南時のしりり上使あくしも奉書かり  
此中事小一高か一慶長四年の出陣の  
事一く之はのは布通りとてしこれ  
あはまいりりあいん一あいらり大くいり者  
時いももあいふや

一 慶長四年 家康が九月七日大坂秀  
頼一九月九日のれり所出陣大坂あく此  
所宿備希一由り一ゆ往作一家康  
九月一四日出仕のとありと討平くたきみ  
うつくの大おをま事一河内とまとまいゆり  
大野修理をか書氏もと河内の増田  
右衛尉月沈十の一所出仕之と討  
中事一り事一に休えりる者あい人元九  
石連氏下りあり一所出陣平岩三月廿日  
と大將あく大書流の家人のうりず九日

大坂へ急下りて伏見の城所  
而當りしと河邊の地を踏勘中一城  
西のあり漆部本銃砲番人たるの口  
たるや大坂入の口は水谷右衛門  
松のち物置に船入し物置を以て  
小城の口は馬屋一丈一丈の地を  
軸とせしとさう次一丈一丈の地を  
一 大坂へは伏見よりゆゆしく中一日さく  
増田右衛門尉を以てさう次一日さく  
大坂城中に石田重政ありとの事なり

さう次一丈一丈の地を以て伏見の口を以て  
いゆくと南中を以てゆゆしく中一日さく  
重政亦日計りたるに政所よりゆゆしく  
重政を以て用事といふと政所の口を以て  
秀吉の口を以て政所の口を以てゆゆしく  
もと政所の口を以てゆゆしく政所の口  
ゆゆしく中一日さくゆゆしく重政あり  
平岩と計りたるゆゆしく  
一 慶長五年正月天下法侍出仕の礼を以て  
らまひたり 門前ありゆゆしく去冬秀相より

廣間と云はるるを進いし志人の中人奉行  
西月の禮うけをせしむる儀がし  
中納言とけり免小組早らむと奏者の  
本多中務石川左衛門大目三司り免  
けり免り中納言と前らに宰相侍徒  
法を更

一 大坂西丸 所成秀吉と申はるるを  
たしき 所成めくは二月より夫守り  
免し申し大坂左衛門堂和泉守奉行を  
御小い

一 江戸と云 家康とて下の家をもとむ  
申主人とて大坂月日徳大寺出仕  
所りくは出仕儀舞をたし不出り分業  
斗りめく出仕の名も小付付すけ入  
りく大くはあつらりハツセツとて出仕  
た一以

一 去るより水園陸より難波のいひは  
織中の中納言殿より二月の付より  
水園陸のさしを別陸より  
さしやん



と下下所へ移しし事人等も  
大坂より上様へ参上りし御事  
ハ為人は天和の歌山右馬尉下  
才右馬尉ハ 家康より下心  
故あり

一 六月廿一日所へ京勝陣と  
此日大谷小名出仕あり

一 所出陣内は白旗の秀頼と  
園のすまは家康と出陣  
此日西宗御清りし事

はめ英全武方由來武方石進  
増田右馬尉長来大坂御陣  
此日御事ありし事  
門休の事

一 六月廿七日大坂所は十七日  
十七日小島御陣ありし事  
嫌く御事ありし事  
門一人小島と御事ありし事  
その御事ありし事  
此日御事ありし事



ちりまての門言り此城を大岡日本  
へ取とら門見石つり兵威の自然の  
出来しと鉄炮のむり事とかなり  
本丸天守り急坂入る出さし  
濤しきし門言りのま鼻入る  
一十八日石部へ長束大砲を捕ら  
所獲利ふを言明水口し門略す  
しと七十はのり長束表りつ  
兵も夜入るのらり兵部は長束  
り二里はしとまふはるんか  
のまら

石部と出 門言り一徳成を長力  
式十人申しとまふ兵部は長束  
田上権左衛門一騎もは所獲を  
一騎俄り出 門言り兵部は長束  
一十八日取とこめ 家康公石部  
はかぢら始を結しと斬ふ  
や甲の表のまらしとけふの  
人はとと馬とまらしと  
はかぢら始

鉄炮記



一 亦六日小田つゝ  
 一 亦六日ありは  
 一 亦七日後原より強く門慶のこゝ  
 一 亦八日ありは  
 一 亦九日ありは川  
 一 海日江戸西丸、志門  
 一 七月朔日ありは江戸小田原のこゝ  
 一 江戸より相模へ通るは大名小名相模國大  
 一 磯よりむら一國府中より江戸津きき一  
 一 毎日下りて江戸大磯府中より江戸津きき一

一 二十九日秀忠と江戸津之大門（渡門）ありは  
 一 系勝追羅く門出陣  
 一 十九日申く刻増田右衛尉永井右近所一系  
 一 於其状曰  
 一 一管中へ今度於橋井大刑少ありは  
 一 あり滞留石部少出陣く申する客之難  
 一 從中より進下り入の進く

七月十二日  
 増田右馬尉  
 長盛  
 永井右近所  
 長盛

け地を右系部尾少く右道持見くも地  
をホーり山て無門目く 門前持系  
上意りそ地をうー一之子一其り一山一此を  
作出いりるを像り百姓たり代友元り後  
江戸より津交まき一里死怖を送る

一 廿日午後一を北ハ大小名

生駒雅直 松原安房守 徳吉院

長束大新 羽柴下徳守 新谷浩守

拓植大惣助 津井淳守 齋

此方より難説し中ハ冬難説去川より

いよの地来りりきも十二の十の十の十の地  
刻すくわーけ地のふくろく落意  
あふり計少くくい川きもく津一  
先子(をきり)一日夜(をい)

一 亦一日江戸ゆき岩附一渡 門前門三

溪路地り

少子志(をい)子授(要馬)白雲馬 光元  
その路(二十七)山名(名馬)本入馬 二十斗

門系物 門系物(之)法師武者(口)駢

門系少(度)種(の)道(肢)持(向)為(ら)極(す)  
門(系)小(性)元(而)持(る)

斗其虎より大畜元一組くめんくの馬志し  
と二行小組の馬と行跡り岩芝之渡門等  
上方より之飛脚も如く其後より之細る  
濃州同く原人等と至行場志城り城固志  
二十万石 所部ふる七千石川く 物飛脚と  
通し 所部ふる天とくいり年より地とらり  
いものけぬいりぬいものさ

一 其二日古河一渡 所部利の小林十高是 志  
中より今より年時古田安房志依のりり  
近新志依り川之 一信列一城りし中

古田子源太郎 所部ふる松平清隆志中山  
信助よりらつ事い商人志小姓志らりし以後  
古河の城り志高志城りて小高原信隆志  
少く信濃志の秀忠志所先志以後岩行志  
カ様志志不 所部ふる三年志 所部信隆志川志  
所部志志

一 古田安房志下野大依り所部ふる川之  
信列一か一らりて上野國志城りる人教と  
信志しこと志志らりて次志志作春志  
若枝志城山のりりて一り志志りり

沼田一也道... 安房沼田... 沼田所中... 古竹と云... 一為名... 沼田... 百姓... 中城... 家... 之...

打... 門... 春... 安房... 正覺寺... 沼田... 沼田... 沼田... 沼田... 沼田... 沼田...

一 古志傳 賤とくら 沼田の町へ  
火とけんちき通く 西房を敵にぞりてあはれ  
けりしとく事 たりけある事とぞりて  
直夜のさぶもり 上田へつぎの侍を  
内敵をな多中勢じすあり赤城山のつや  
葉月志つてい通く事 けりて事 佐藤代  
後軍情ありとさるものふく 物とけりけり  
あはれものなり 此あはれ 上赤く帰くれ  
大藤よりふ所の町へ 在馬代 古とさるものけり  
すけり馬代 時とさるものけり けりけり

一 け所めく名けり 百姓と三人 九條の侍  
きらきい 大藤と 柳原石見人と 西  
領あり 随言と 百姓とも けりて 九條代  
賤とけり 町と 焼きと けり 沼田より 大藤より  
十六より 女藤原殿の 元い 忠い けり 小佐  
別へけり 上田より 女藤原殿 由志 後と けり  
けり けり 侍も 系志の けり 大佐  
直夜い けり 沼田へ けり けり けり  
馬も つき けり けり けり けり 沼田  
番代 けり けり 池下人 けり けり けり

地下侍人等々々々沼田より沼田まで送る  
しげやうやう沼田より沼田まで山坂育  
志あやう二十服まであり

一金法市石田沼田沼田より来た物若  
やうやう沼田沼田より来た物の子細  
たきしもある

一 木と日小山一志所

一 木口日古田沼田沼田沼田と佐井右衛門  
所へ人質やうとよのけ使木六日より人  
質より小田系の水糸一対一場忠より

しきり分しく苗付の家原と一対一何々  
矢張り平上の人質小進と平上何々の者  
と方り至極あり人質と進と平上とを  
そ人も平上何々々々中々七り古田沼田  
とそ人佐井一とよのけ古田沼田何々乃  
湯の脚みく同いさ何々々々平上何々  
内府ちのいの条々々々十三ヶ条の書面  
と方りある

細川越中守也房自害の月焼云々  
家原と味方り何々何々の事々々夜中きに



石川と城下へ長巻とほりり玉鏡よりわ

一 系揚り者三人てんごう 河中へ普元六

千人たきり

一 池田二左衛門内義中一きの外さきとゆき  
普元と五人の蒲生茂之助内義も同方

のり

一 世帯より来りぬ肺状と云ふ寸野方  
ゆきと登とゆいりらへく来りの中  
又たらみより緒のよりよる中せく

其のりへ或人推り来ると云ふす

一 其のりら南陸此良 秀忠云津美に  
所陳

一 廿六日津田小平次所前(石川)の機嫌  
今度合戦勝りんら何れも望みは得  
叶へらんら約束と云ふこと

所意少年所中と云ふ 合戦に勝る言のま  
て有はなは 何れも望みは得る言のま  
と云ふ人へ 望みの事はなは  
望みと 所意小平次はなは けなはり



し多法乃具とくね一 家来はくし  
はねふく大井大物匠一う月一の大物匠も  
りあく酒井大月を捕あふ首役り  
き一之角を更所の家来のものも一黄倉  
配ふりこの一或人少平次中いぞ洋録  
可うつは地所一きり一う送あふけら九  
はく小平次中いぞ一仕事くせまねけ  
くはとけく不入事の中  
秀忠云家来との中代也一門三人一美金く  
か一はあ一武十枚を命の業代とくの一と一

其身知りもあふ石とらふ石跡目一か一或名  
隠れふく一残一死後くは知く一と一これ  
いとう契

一 廿七日迄の大将元本是川を白澤ま  
小陳とあふまの石蹟小山一其らもる本是川  
くく白澤まく七つまの

一 ち方一はあふ一歌くちり細川城本も西房焼  
死出取國一はあふ山城まらく一く一らま  
丹後まら一はあふ一九別あては火友  
豊前國あふ一豊田如水とまら一は後國

少くは加友集此小西集人々を以て  
ししゆくは持疎切りしゆめ新(中)里  
大和と申事法あり武(一)城より  
七(一)乃其形及これ其あしはをりたる  
そのあをりたる者人六六寸も有るの  
わさやし(一)はさきを扱あしくしり  
一(一)くはゆきまのり大言りそ申山  
大和事集と申言つ御(一)ぢけの  
あはれも人のしりたる(一)事(一)も武具  
あ(一)はゆき(一)は人言とあら(一)所(一)る(一)

一(一)出されし(一)ゆくはゆき共(一)は  
あ(一)る(一)事(一)集(一)と申(一)言(一)つ(一)御(一)  
あ(一)は(一)れ(一)も(一)人(一)の(一)し(一)り(一)た(一)る(一)  
あ(一)は(一)ゆ(一)き(一)は(一)人(一)言(一)と(一)あ(一)ら(一)  
あ(一)は(一)ゆ(一)き(一)は(一)人(一)言(一)と(一)あ(一)ら(一)  
あ(一)は(一)ゆ(一)き(一)は(一)人(一)言(一)と(一)あ(一)ら(一)  
あ(一)は(一)ゆ(一)き(一)は(一)人(一)言(一)と(一)あ(一)ら(一)  
あ(一)は(一)ゆ(一)き(一)は(一)人(一)言(一)と(一)あ(一)ら(一)  
あ(一)は(一)ゆ(一)き(一)は(一)人(一)言(一)と(一)あ(一)ら(一)  
あ(一)は(一)ゆ(一)き(一)は(一)人(一)言(一)と(一)あ(一)ら(一)  
あ(一)は(一)ゆ(一)き(一)は(一)人(一)言(一)と(一)あ(一)ら(一)

のれ腰がーのみ多うま倍なる法金  
こんとゆふつるのまきもねごと切のりね  
根中まや津まよの家来一役とあも  
しうささるのあく  
家来は城あも

秀忠も 伊自堂のよのあし架  
一 廿八日おつ時り 三つも殿を番り小山一城  
千介石儀年番り 大ね元小山一城  
よの小山古城の内り 大ね元小山一城  
廣間下りに伊用い番り 三間守方の  
け殿ゆつくらを此のり多う 大将志

けら内中りなしきのうら守方れすみ  
く中産少く 上意の作出  
本多中務本多信成もあ人有り三河を殿  
いあめとさの番所の小産一伊らに  
ゆゆい大ね元白浜より小山一城  
りり十七八里のみらと志のまの城のり  
も伊振舞もねりす茶少くもいす  
大將元福徳な馬を更羽柴に信長な京更  
此名もむまのり 持信もまもみ第一  
二つらのりの十六年馬志り 守方あく

多岐美と云 門意は氣は廣間よりその  
中よりありと云くは是より大將元  
も十七八里と志のふ美と云はる小山と  
門のく道もよんはぬのかりきよの  
つりさいおとら申すまのむし  
くともごちとありし門と大將  
元とありき一守ありと云く  
福徳一門用らるるなりと云く  
奥平後多徳と云く小田原中とのちり  
ありつらりしありしと云く小田原中とのちり

ゆきくわいつくはりし門のく上意あり  
つさなりしと云く後多徳門のく後りあり  
あり福一門のく後河しり  
清原まくの城のく藩代元をきつはら  
せり成はると云くはるしと云くありと云く  
三か川山城のくはるしと云くありと云く  
あり地一門人ともはるしと云くありと云く  
は意はるしと云くはるしと云くありと云く  
は二里余にりき方石のくありと云くあり  
皆川号石余のくありと云くあり

一廿九日先主亮の人元不殘川とつらり  
はくまきと雨の道にりしをききつらと  
六のりしとつらと法人とありし  
るたりしとつらとつらとつらとつらと  
志とつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらと  
無等とつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらと

出陣のとまきとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと  
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

一 毎日法勢大しつらとつらと

一 八月朔日

一 二日

一 三日

一 四日甲辰り小山内全右衛門より移り  
江戸(内)内藤り栗橋の舟とつらとつらとつらと  
内藤の舟とつらとつらとつらとつらとつらと

船一、二、三、四、五、六艘少くわたり  
 川上へ去りし人ともあり馬志あり  
 といふ事あり其の船も渡りしは  
 此はぬららの地へ船へしりて舟も  
 の一騎しらのものもあつて浪り  
 一 八日  
 一 七日  
 一 六日江戸へ志所  
 一 九日

一 十日伊極庵へ料理し間へ午時出所料理と  
 して起し言籍を料理し下へ端とけ火と焚  
 惟 御前へ中勢某令に係三人料理  
 中勢へ此地をあらりて新ふれ成  
 け存りし何方より来るものなりといふ事と  
 出まがり書文とありて切りて此成り覺  
 去りし休身落城へ惟しよおる事  
 仰出西の方とて候ししとくと門候と  
 りりし事とていふ中勢 御前とて  
 ありし中勢の事ありし事とていふ事



少部某も少け 所殿中兵中督皮の入  
 以し何し一宿 千中一返出くは  
 此旨とむ 誠哉助之を以て使らざる  
 日古受之 而中以仲勢も上の方 下より  
 是も日ハ受之 而中以之を以てし  
 家系と 所出馬と 爲る中兵 出馬  
 叔のたきうえり 延徳のし 福一 勾の下  
 くらたら輝政あす 小叔のたき くら  
 と只備 之を産 中勢 伊井 針 権 くら  
 多ふし 多くとせ 福一 福一 福一 福一 福一 福一

村 誠哉助 未着の 福一 勾 哉助  
 對一 各け 出馬 叔の たき くら 福一 福一  
 兵 中勢 伊井 針 権 くら 福一 福一  
 福一 福一 福一 福一 福一 福一 福一  
 福一 福一 福一 福一 福一 福一 福一  
 福一 福一 福一 福一 福一 福一 福一  
 福一 福一 福一 福一 福一 福一 福一  
 福一 福一 福一 福一 福一 福一 福一  
 福一 福一 福一 福一 福一 福一 福一  
 福一 福一 福一 福一 福一 福一 福一  
 福一 福一 福一 福一 福一 福一 福一  
 福一 福一 福一 福一 福一 福一 福一

とあり汗をみせたりゆりてゝさうしてふらぬ  
卒尔なごの使のやうに法人の會を裁助  
一言も中勢吾が少捕<sub>小</sub>  
中勢十五不中いぢの  
ゆ使り裁助と名義<sub>以</sub>裁助のりてふり  
その事— 家業<sub>云</sub>人との後志<sub>い</sub>の  
事と日本國中の侍<sub>氏</sub>のり<sub>り</sub>のき<sub>は</sub>は  
ゆりとり<sub>一</sub>のり

一廿八日正則禪政<sub>と</sub>とたあ<sub>る</sub>ま<sub>さ</sub>の旨<sub>旨</sub>破集<sub>一</sub>  
城責落<sub>一</sub>首<sub>り</sub>の<sub>七</sub>進<sub>上</sub>と<sub>新</sub>系<sub>本</sub>の<sub>一</sub>  
と<sub>ら</sub>お<sub>り</sub>— <sub>仕</sub>河<sub>と</sub>の<sub>一</sub>陳<sub>と</sub>り<sub>中</sub>作

一 所出馬の—と<sub>中</sub>紙<sub>の</sub>首<sub>も</sub>志<sub>も</sub>且<sub>か</sub>ん  
の得<sub>一</sub>と<sub>意</sub>朝<sub>日</sub>り<sub>所</sub>出<sub>馬</sub>

一 廿九日 八月小

一 九月朔日 西の丸 け附の徳兵衛出<sub>所</sub>の<sub>一</sub>き<sub>あ</sub>る

石川日向寺 今日 西堀あり 大事の門舎<sub>裁</sub>  
し 所門出ぬ何<sub>と</sub>し<sub>一</sub>の 所意<sub>り</sub>は

西を掬<sub>ゆ</sub>り<sub>者</sub>今日 羽<sub>け</sub>ふ<sub>由</sub>の<sub>一</sub>  
ゆ<sub>ら</sub>ひ<sub>り</sub>の<sub>一</sub>出<sub>所</sub>

一 朔日 晚 うた川

一 二日 水 ながり

一 三日小田原 籠列中納之殿より使者永井右近  
 所へ来りしに、事々としてハセの色の中事  
 實儀あり、取寄の事とらひの事之用也  
 所云加茂左馬尉使去右近所へ来、火止宗任  
 在り、事々中より、事々としてハセの色の  
 一日、由廣間中渡所へ、馬志より、  
 榎田へ、事々として、事々として、上云所馬  
 志より、事々として、事々として、事々として、  
 事々として、榎田へ、事々として、事々として、  
 一日、清見寺

一 六日葛田  
 一 七日中泉  
 一 八日白旗、父より、後堂和泉より、来、曾  
 一 事々として、事々として、事々として、事々として、  
 定より、事々として、事々として、事々として、事々として、  
 籠番中納より、使者来、所云ハ、事々として、  
 事々として、事々として、事々として、事々として、  
 一 九日葛崎  
 一 十日榎田、此日、西の海邊、事々として、事々として、  
 一 九鬼大、臨事、事々として、事々として、事々として、  
 事々として、事々として、事々として、事々として、

新一行より少く見ゆ、概田渡辺より  
 六所より大船を駛せしむるなり  
 白きりのとの幕にうたふ九鬼大隅守  
 赤のししをいし門を志し持も  
 さんたりし白少く門目見いあふ  
 鬼角れけきれれ  
 十一日清波十二日門前留新入後堂和泉守  
 其来夜すしは帰が風と名られぬ業  
 門前利ゆ枝氣  
 十三日清波り法人武具あり 破集一中

納豆及おを市で感荷あり一志門  
 破集よりおらにひりりあり  
 とあえやをまひ大櫓り備前中納言及  
 小西杉澤守石田治部少輔福永右馬助  
 其外新堀少道とひりり  
 十四日赤坂へ志門破集と夜明ケ小の言蔵  
 りり 活能元使者元と赤坂へ市中小  
 志作勢と内さばひむく言所、長来  
 大茂を捕新茂寺、陳より旗、  
 といり赤坂より武里ふりの一赤坂九山小

門前大村の方一ヶ馬志一扇夜の籠  
七本白虎の柄け武宿本なくまをさ  
大村より人殺し白籠とむ十本ふり  
あてふくは種よりけいを後河井村  
或は少捕馬とけ合境小流絶つきくす  
く所一とむけ馬と二十餘軍う多れ  
不入りけいともく如多中勢とけ事  
け事くけけん定ま大將死と先け  
ふ人六人け後美といふありれ  
元はさやの多んめく具是とめさく

恙行よの相威少く 門前一美と作  
二番より口計とめさく重具是相形と番  
け具是と忘一腰當少く口とまつてに  
具是相形めくさむ法侍よりけ相り  
さ法にさくのいさつふもまきいけ  
あもさく明日子胡く九山たてせられ  
番目小大相元け合裁とけ 信濃是を  
上野其亦古き功者元も一系不ぬ日甲胡  
け女房武人け供 おかり ちくとり具是相  
あしけ 門意 門前一水姓武人居中

い、伊具足出はと母く宿へ支寄りい  
かえり、伊次の子、宗意、中茶の湯坊主  
同は仕女房元伊具足と云り出、之と  
宗意とい、坊主あり、ついで  
ゆ、伊言なり、おきれ、小神のり、  
明計、伊、思、司、あ、その、水、蔵、お、の、の、  
ぬ、ま、ま、と、り、出、所、り、は、こ、り、海、せ、す  
その、数、多、く、出、所、い、ら、方、下、尊、り、  
歌、の、方、と、り、伊、舞、も、澁、七、話、絶  
た、り、伊、跡、り、か、け、り、と、大、い、い、橋、井、り

多、の、人、数、せ、り、い、中、山、十、字、り、大、村、り  
家、康、云、伊、上、り、と、人、と、出、い、二、夜、い、人、数、と  
と、い、い、り、い、の、舞、も、趣、り、い、中、野、お、よ、り、は  
中、山、は、く、中、野、お、み、く、も、い、り、ん、や、と、夜、目、り  
人、と、出、い、い、者、性、家、康、云、伊、上、と、意  
と、中、山、り、日、言、六、ッ、道、小、大、村、印、の、山、屋、十、斗  
と、焼、亡、世、時、大、村、と、出、り、実、ケ、名、一、あ、れ  
い、い、子、細、を、筑、前、中、細、と、後、む、り、ん、や  
風、使、い、仕、至、り、と、す、舞、い、と、く、と、出、い、  
あ、ま、と、之、の、礼、を、あ、ぬ、人、数、と、関、ヶ、原、道、々

少く福一由備と可一はけと通の  
 福一由人教も大村らり来る人教はき  
 せり一は集り赤坂しとるのり  
 一小前結石入し所法度法勢ともこのり  
 一はひあつたあゆみく小前結石道へ  
 一とくはつたあゆみく小前結石道へ  
 一は多くた一はけ中へ小前結石道へ  
 一とく一思一あつた多勢をせり  
 一うらむのし陳とあは侍も十むり  
 一敗軍のし一赤旗白旗一思ふん

一きふより赤坂まへけ人教夜まより  
 一聖日年の刻さきく清き  
 一十むり小細雨あつたはひあつたきりぬり  
 一しる十むりうらむとるあつたはひあつた  
 一百も十むりあつたはひあつたはひあつた  
 一はひあつたはひあつたはひあつたはひあつた  
 一事もあつたはひあつたはひあつたはひあつた  
 一家原と伊馬とさつたはひあつたはひあつた  
 一小西村と伊馬とさつたはひあつたはひあつた  
 一陳場と伊馬とさつたはひあつたはひあつた

は香のしりにらまのむしこーは馬口  
まうきまのしよみ家も人も馬とのしり  
けきまのしりまのしりまのしり野村  
野村まのしりまのしりまのしり野村  
野村まのしりまのしりまのしり野村  
野村まのしりまのしりまのしり野村  
野村まのしりまのしりまのしり野村  
野村まのしりまのしりまのしり野村  
野村まのしりまのしりまのしり野村  
野村まのしりまのしりまのしり野村  
野村まのしりまのしりまのしり野村

のきとーりあらせらまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり  
まのしりまのしりまのしりまのしり



のあまをいづる三度なり此より勝負は  
あまは之の小業又市原津清盛も人  
物への心使ひをいふは清盛清盛の心前と  
持余は合戦は勝とていふ所合戦も  
右田和泉守記録より又一と首も此ら  
清盛の首よりいふ所所前も此ら  
右又一と首ありをいふは右田和泉守  
をいふ中より

所合戦の事いふ右田和泉守記録より  
とありまはて右和泉守は関ヶ原

紀のより十むらひ合戦の事いふ

一 翌日十八日朝兼井の南岳の鼻より  
安藝宰相右川後らも長宗我部も  
長宗我部安國寺二万計より後地を  
使ひ居陣より口押しの心前と  
羽柴三萬の陣にた系を渡河元遠に  
元一にけりしれ内府も右坂拂焼  
野村も実ヶ原の間にいふは此の人数  
よりいふは所馬由より真隣觀翼

伊勢にそと給たり深くゆりて雨も  
とらぬり托の女も母之主に似  
己の刻斗り小穴も晴けふとよりけり  
沃井た埴尉祖父に法外激動する見  
ほい伊勢も出合あ合うらふお誠心  
セのさる名りりり少款治部少輔 昭徳公存  
小西指津も無うらと見申後お川と  
不破の関をうきたのりり小宮村と  
く南よりさうとよりむいく人較とさる  
大谷刑部少輔 備前中納言平塚同備前田

武藏戸田内記石より深小岳陸也言と川  
谷とよ 関ヶ原少将之人数り出ず西水の  
山と後ろふりり同太日夜己むりり  
恒卒と出し 町先持相業在徳の妻  
相業越中守黒田甲斐守井伴少輔少輔  
如多中務少輔 大野 徳理 龜 行 免馬比  
右ク遅しきに白き切刻のさる也  
たよーとより何し若一同く嘯とがけ  
らさるり伊勢もりる合推つおささ  
川 忍いくの晴負りりむけし引分りき

例一 首とつら切り討り甲智七七集と系  
大沖修理けり首とつら大将軍れ門  
目し無ききけ襲取不斜福勝刑  
少押同伯考者首とつら上賢り使  
一しつ初とつらつらつらつらつら  
よりみ後堂作後者系極侍從西しき  
しつらつらつらつらつらつらつら  
く首とつらつらつらつらつらつら  
るの中しつらつらつらつらつらつら  
石川修賢者退りつらつらつらつらつら

首と取大將軍のけ目りし一書首の  
より名なりと取つらつらつらつらつら  
押合と鉄炮とつらつらつらつらつら  
りつらつらつらつらつらつらつら  
甲中もつらつらつらつらつらつらつら  
を入合鞘とつらつらつらつらつらつら  
りつらつらつらつらつらつらつらつら  
花とつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつら  
の働けつらつらつらつらつらつらつら

子島河内古田減額正 杉子内匠助  
形紙の忘書 佐久男又書 佐久男保六  
七人見合一同り 檀々系込り 是實代  
法子例一 如事通り 是のる者有る  
とあり 津田長つち 戸田武蔵守と書く  
銭の終一 武蔵ときり 佐七首と書く 織田  
有樂女父 古田織部 働る者 是以類 戸田  
武蔵守内り 病見合 是と書く 曾上りり  
是古りのと書く 杉子内 仁書く 是と書く  
小の法子も 武蔵と書く かく書く 是の由

今度法方一切くまり 枕と書く 是と書く  
計免答と合り 合書法 子島書書  
父子田中 是の補 是の補 元水 山正  
石田治部 補 津津 是補 是と書く 是  
らん 是と書く 是又押つ 是と書く 是と書く  
是と書く 合書書 是と書く 是のけし 川内 火巻と  
あり 是と書く 相銭 是と書く 是と書く 是と書く  
大谷刑部 補 佐中 是と書く 是と書く 是と書く 戸田  
内記 佐の口 是と書く 是と書く 是と書く 是と書く  
是と書く 是と書く 是と書く 是と書く 是と書く

作小倉庫村或是在河村助重の奥平  
及在藩の邊横切りてこれより西に小  
お裁口人もた枕とるて討北より小坂  
曲高節孫子高十郎 福徳市爲 兼松又高  
父子坪内高太郎五人 宗高可高徳代  
在藩の古高徳谷利高の是あり人々急令  
西とあり高より入切らるて討北今  
高のの高名有り高程り及堂高蕃以馬  
た迫越願く新高節と組討有り新高堂蕃と  
り代高とあり切言高より小姓又あり新高と

打たせしむり 鳴た迫り方高知子供ハ打死  
いより高より 別く抑くありて小裁口も  
筑前中地三 昭政中勢村末の内高小川代高  
赤高久高 所忠高也 一の及高い有り  
あ計多人数 後高より 壇とありし高切口高  
切高岡とくつ高たり 高より 松平下野高  
年之高進 入切高 高より 高所の高高と  
高より たりし高より 高より 高より  
東國西國 西高の 高と 高組討の高より 高  
天下高めの高 高 高 高 高 高 高 高 高

肩月可為後胤の飛渡儀の事り井作  
吾部補中伴い中法大り切多り里お  
親く被座此類働り大谷刑部少輔  
八馬と少く暇と切去程り平塚同情当六  
身が形と名向切く是事樊崎の法  
り不食尔知り小川大馬地内り榎本等情と  
言よの有平塚同情京源の合とんり  
切越く平塚と衝伏首と事石巻大  
言迄とらうり戸田内記是又法方一  
切明り切多り討死ありさて晴津

多摩の志元とらうり切後より重多中智を捕  
中筋一切入切らつり伊歌并是事此記  
後川一山下り伴吹と事一多り希上り  
敷毛の追り不知り負南之表此人教  
只ひ一ちりく小敷軍少く此多り教人  
の首内府之所実持多れ法卒監く  
人馬の易と事休其後竹和山一人教と事  
内府の伊勢懐と散と夜と山本大谷刑部  
が補居持の小尾り伊持と始られ井作  
多記補ゆと事今剛口不持と事七伊馬

まづ前後たより候へり 門前より  
今も軍入候き 鳴津を陣取馬より  
たす者二百計 各陣取と志申候  
一と井伊を敵少捕見候は是れ  
細うんと候と申し 志申候  
わさしく 旗炮少く候は是れ  
折と申候と申し 旗炮少く候は  
政とのごり候と申し 旗炮少く候は  
中より鳴津内のある者と志申候  
一と志申候と申し 旗炮少く候は

一 昨日本多中務と馬より旗炮  
候一と志申候と申し 旗炮少く候は  
本候清見と申し 旗炮少く候は  
と申候と申し 旗炮少く候は  
一と志申候と申し 旗炮少く候は  
小姓大計と申し 旗炮少く候は  
と申候と申し 旗炮少く候は

一 堀尾信濃守の御下  
合戦なき 関ヶ原の御下

ゆき川よりまけとねり馬ととく大い  
の馬をたにひせうねり馬と百とあり  
けりおよりや小むるゆり或るに深  
人馬れいさりしけりのはいりか  
みへいれん物の具さーのを一と  
多つこの音じまの足けけけり  
黒地ありわけりうへいり物ん  
淡施り持れあけりもろく思へず  
河本陣（をく備へ）とまつる後  
系りい時兵の合戦あるに

- 一 けり右左利宰相者川とたりれ山の峯さく  
ゆとをてり居りい備（をてのあり）たは  
たのる一里さけりその山のふりさけ  
たをいれく敷も 家産も 河本あり  
をいれ山の峯よりふとたのまらまら  
さー深一石ありありありありあり  
ちりく思へり
- 一 下野中殿いありいれん馬のほふりつ  
しりりありありありありありあり  
いりす金といふに少捕（といふ）武士れ



子とよふ一人しつゝ何れもなきは  
つゝ討死せし其分もなき事なりといひ  
馬の口としかき一匹も自らつきたり  
うふあつ極なり其分もおろし紙  
おひせしきしつゝ下地も敵の合戦か捕  
むふなり 下地も敵  
二十一日

一 大谷刑部が捕の合戦中けふなり馬と  
あつて腹を切られしと和泉守記録  
其刑部があつて盲目のまゝ合戦場  
あつたといふ事なりなりなりなりなり

この助少中侍りし中浪合戦中けふは  
さいさん尋しきいお助いさしし  
必定中けふの時合戦の捕けし中浪  
あつたなり事なり出たりといふ事  
まじらり兼日お助中浪されし  
合戦とうらあしお助いさしし  
首とわたり其分も討死しといふ  
お助と岡東浪人馬なり少く刑部が捕  
馬危別苗少なり事なり其分も討死し  
三十餘なり事なりあり東西入札なり合

んうら死のりたたの死うい多きふと堪り  
此一以合致ふいゆをばくうく思ふれ  
刑部補陳場、家康公一教を以て  
刑部大輔赤死七よきいやく夜を志すに  
刑部少輔お茶のよのいさのありたるを  
かこりいふ助といふ部小倉、百永主悟井  
田六を懐くや智言ゆくは、  
かよりいふいりあも志月うりあつた  
きよこのい中これ一有り世道はと人  
の用いり三中人

一 十六日佐和山乃南眺るみと云村に  
の山、野原いり山のありて小倉二あり  
田るむありも、  
いふ一入口より小戸もれ一入口はわき  
り南山中まへ一本ははたみおれ  
きり、佐和山岡よりとるく、  
手ふたつとれ、  
い小倉れお芝原く、  
身三十身計一、  
所目見のまゝ人二十人年入

出りり事履 命をせんくく... 聖く御書元とせも老人も亦一  
中編 詮語宛 云々一系 一書物  
つゝさ... 御心と尋  
つゝし 門中 済へちつふところは伊  
籍本 元宿とせうやふい 三十問も四  
十問とわろ知りて事一の宛りて事平に  
おの... の... 徳の徳人  
小竹和山 俗の百姓は ありやう 野原  
りけりしもの一人もれり十問と何事

一  
所斗れとさるに 何れ無事元百姓の家  
何よりなぐ 扇...  
関ヶ原... 山腰 住まは 可やとせ 成りば 生  
あり 三十問 斗り 芝山の 名てさうり  
たす 交自然 所 受ま ぬぬ 亦と 細竹と  
... 紙一枚... 鶴...  
火と 燒よ ね... 料理 志... け...  
... 今 時... 石 斗りの  
知り... 舟 渡り... 舟... 舟...  
... 小 桶... 湯... 舟... 舟...

くりんこ三人の并苗一ツありあはれ  
谷しりくをいりちき町よりもそのうも  
何んき料理人 或人 二人 二人  
地より見りてしき岳のあり  
家原の 押疎しとては道身幕しつ  
七解くいと自然入中事し方しつ  
令に程くもくも幕をく 一  
六のしつこ馬を走り 法事万一  
成ゆ後しつこ 志入もあつて  
中し幕をのこすのし入もあつて

得ゆえに事いりなり 今しつ  
幕をのこす ありぬし 法事  
きかしのつりあり

一 十七日午時 仁和山城へ夜より人死と  
ゆ後のもよ 出門しる山城 鎌倉を利本  
しつこ 仁和山城のあり 仁和山城  
新まき 十所解のあり 仁和山城  
らまの白少神をいりしつこ 仁和山城  
ゆ後しつこ 仁和山城のあり 仁和山城  
仁和山城のあり 仁和山城のあり

てきこ成利ありありと下へ海道  
なり多勢也一十方りあり事ありに  
十方り小舟始さいけん船を来いゆえに  
いよくとかりあり小舟始さいけん  
九方儀通りありと河東小門意初付る  
三十七日通りありと神保町を道具付  
い馬定来り六のしを及を付い十班り  
かとも重りゆきありい切れきいりあり  
ありありいひまるといりえ始ありいり  
あきりいりいりいりいりいりいりいり

河東大馬ゆ い河平 小舟始さいけん 船名 船を来いゆえに  
為まともい今いりありいりありいりあり  
陸一少を道具沙汰のいりありと河東を  
むりありありありありありありありあり  
河東をいりありありありありありありあり  
いと河東一色一と色一色一色一色一色一  
小舟始さいけん 船名 船を来いゆえに  
十三日 船名 船を来いゆえに  
是をいりありありありありありありあり  
忠右衛門 船名 船を来いゆえに

小倉とあり一むりのものたる 証據  
の 印出りし渡辺忠孝や 三石 水井大進  
の 子名宗少のの 口言のくまの  
と 地を 伊佐の 元忠の 小倉の  
いと 伊佐の 伊和山 とうり 中一と 伊  
小 伊佐の 一 証據の 伊佐の 一  
小 倉の 具の 馬改を する 加 成の 地  
前 にも 伊佐の 伊意の時 伊佐の 元  
の 一 忠孝の 弟の 忠孝の 伊佐の 一  
伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の

一 十六日小倉 伊佐の 伊佐の 伊佐の  
伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の  
十七日 伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の  
伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の

一 十八日 伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の  
伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の  
伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の  
伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の  
伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の 伊佐の

あ〜の申すつて 竹和山所り始りて以  
来す〜は至の心け 竹和山城の石角  
生 生 天守也く 焼死長谷川右衛門  
と竹和山〜こり〜内〜四方はは  
首尾少く 後少く 門前へ出或級少  
名少く知りて 寺方石 生も 寺方石  
竹和山〜石角城以後 金殿と少〜も  
此〜少くたく〜可なり〜の〜  
一 十九日竹方の人あ〜は 竹武士〜ぬ  
〜い 忌せずらり〜具是か竹の〜り

宗金箱とき〜きんづりのき〜ゆ〜  
い〜き〜り荒〜前後 打〜り〜  
い〜ん〜あ〜元と〜子の 大石元の使  
者〜も〜あ〜い〜とつ〜り〜  
家康〜の〜物〜の〜り〜く〜る〜二十町  
も〜ら〜き〜り 金箱の〜ん〜つら〜き〜り  
い〜し〜後〜一 政〜く〜は〜き〜く〜政〜く〜て  
為〜人〜り 威〜敷〜は〜く〜は〜き〜く〜ぬの  
い〜い〜く〜ら〜す〜く〜ゆ  
一 十九日八幡山 十日下地 寺殿も 八幡の通

家原よりいさなり

一 春日原津

一 小西掃津昔 関ヶ原のころついで先とく  
進ととれと和泉守に帰るも慶長  
六年の秋某城和泉守父子と同道  
本宮路へついで江戸へこれ関ヶ原を  
別ととる城和泉守古き人ふとて  
亭主とていふ也 去年合戦のころ  
古いつと向て亭主と合戦の入り  
かり其時地下人共落人の事といふも

くまなく地をうらひあへいふ也  
よのよと当所の地下人等皆同道  
いふといふと尋りて小西及とい  
ゆけりいふとれりいふとれり  
中の事もよくいふれといふのよ  
々々といふとめいせといふも  
ねえ落人といふ某当所のといふ  
といふ事いふ落人といふ侍と  
ありいふとあつたといふ大いなり  
といふと生所の百姓人小も知は



子細い如きと種友の合中備前中納言  
うらまへとてい人うらまへとて  
めりり後日りに左所のまづらひとて  
お威いよとの月おと人ほく  
い多し事を用とよと左所の山おと  
そこのう人來りてとて山の方の生山  
りてと拙者所用とて作らりての方有り  
ともおのびのたてとて中とて是非少くと  
ちり是れ來りてとて山に達する入の事  
とておのた必ちとて來りりて料とてらん

お中いあきとていり何の所用とて中とて  
我亦と小西格達とて内登はとて  
あつととてわとて山に山法のおととて  
あつととてわとて山に山法のおととて  
らとてとてとてとてとてとてとて  
らとてとてとてとてとてとてとて  
切支母の法り自害の心あつとてとて  
い左の百姓もい中い山とてとて  
とてとてとてとてとてとてとて  
家原様 門本陣 山とてとてとて

乃光一人ふうとまはひくはひりり  
ゆきこは木中丹後ち友あきといふ  
ほし小舟友何勝少くうり丹後ち友  
あきとせまうーい休中うと中入られ  
さうと週ーと人とさうー小西友  
と茂ゆ友旅あく入るい茂ゆ友とさのみ  
さうさうたつ新まゆくつ清きとさうかま  
とさう中い茂ゆ友と旅亭少くい  
小西友と健とわけ中いせまうと丹後ち  
あきまな中い安くさうまうまなわ

いりりりりんとは一急あはひいり  
黄令十枚を下の丹後ちあもいりりりり  
といりりりりりりりりりりりりりりり  
ゆれもさうなゆりりりりりりりりりりり  
すけ後ち本多あ房さう中い國配あ友  
あきとさう中いあ人の事とさうあ心  
はあ人といりりりりりりりりりりりりり

一  
江島中い歌とさうい元の知り新は  
いりりりりりりりりりりりりりりりりり  
中いありの法度判れ小あ紫た島いあ

北紫之馬 浅井大系 名も山所  
名も山所 浅井大系 名も山所

一 廿一日大津

大津城一渡所 城中家共 願せり 大津の  
町心一瓦根とす 南のつ脇の長  
下い 大津町中 燒拂 少海も 芥田と  
法人は 津田の 通辺より 三井寺  
法侍 配 山料 是 小六 七万人 陣と

大津 輝元居城 京一 山科 小  
関 守之 入 出 守 近 後  
登 助 加 原 右 衛 門 左 衛 門  
以 福 持 大 将 家 康 氏 之 名 也  
中 一 守 口 福 守 之 名 也  
口 福 守 之 名 也  
竹 切 後 中 守 之 名 也



小治政といつたものゝ名とさきより  
 在りて一と存案書とてそののり打  
 古よのりのりとも書とて一と  
 以取切後紅 何れは圖書とて京陽使不  
 其名世とりりくれば一  
 付ふ 家都とて何れとて大石元  
 もあはれとて下の 何れとてや由  
 中何れとて一とて秀頼とて一とて  
 法人下とて一とて 何れとて一とて  
 あり

一 備前中尾 度生 北志 尾田 中尾 後守  
 西尾 豊後 少少 何れ 何れ 山 尾 尾 尾  
 石 鐵 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾

一 亦二日

一 廿二日 河 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾  
 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ

一 大津の城 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾  
 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾  
 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾 尾

此の所の跡にわたりていた人地りも  
おろしき城といふ事ありし所一  
名城といはれしも南はし今もは  
おろしき一がけなれも一城とい  
まじししも名城といふ事あり  
うくてもまじししも一城とい  
内意けしなすものも一山側  
おろしき人あり大津の城とい  
後絶せしうらぶ一おろしき  
二の所一松を及け家りし大津の用あり

屋根をすくう 後絶の所た大津の  
日におもひの事 松を及け  
一の所のうらぶ一松を及け  
系一松を及け一松を及け  
所人といふ事 松を及け  
のうらぶ一松を及け  
一松を及け一松を及け  
一松を及け一松を及け  
十六日寅卯辰のけし大津の  
たしししきんめし大津の

比今一日りりて運と印をきり  
残多々系極及ゆは合少法今なり  
系極及ゆ城あり殺肢とさめ海一  
事いま海一きと印ありともあむ印  
ちとちとのありゆけ少く右のこく  
いたた立死家申古来よりありたる  
いり大津一せめりりい月あり

いと志進あり  
一 石田治政痛とつて石田中多殺御り  
あゆむ世の國山の程と系とすけいこくに

尋ひぬれを新しきはらむ相多殺御  
宿新のまこと夜入を人通の昔のま  
ら者ぞと改らゆき基所のあらむと  
えらこのく一水のみあくも何もの  
るもこく一はゆり海一昔のま  
より合らりいゆきおぬふぬあり  
くさゆきの物ありとくさゆきと  
くさゆきの思くく石田がなり山とちの  
らゆの小神一くさゆきとくさゆき  
こくみのとくも志よられぬあり



サ一の門跡中一ありありおのりよく  
ひびらんあはさきくひの越えがのりた  
かきもよあれよのへんあき一ね  
小性きんはさよふしよねぢらん  
のりあはらうはさきくひのね  
よりあらうよあを右のふり小性  
より一カトくびとあひまりよせカ  
のりよ、左根へつらりあびあきひり  
女園寺のあれろくよとあきりあらひ  
大津へ因り一くあつくと村越高助

けりつけ大津のなると小西と女園寺  
とあひやひ小西と左一きのあ中ふらひの  
ひととあられ昔のもの、此一女園寺の  
津きり一障子とたつと共うら小西の  
系、系といふも面白もあつと世は合  
ひやひ小西と首のひのひとあき  
福ときりあつひあ自由とあき  
いりちさの女園とくひとあき  
よりあき昔あきくひのあき  
あきあき中焼けあきあきあき



と申して京へ申せり一り只今の  
内蔵勢少くは良時と申すもいりぬ  
と申す内一坊少くは青元申すも  
京へ入る事一法度といひてあつた  
者有も若林和泉而永之膳瀧本と書  
岩布仁鳥小倉越後山下又冊けらみ  
の流十餘輩此有也但はくは故を  
つて組のふりにつた  
一萬津三津只今錢より内々修勢あり  
うも修勢國と申す如泉の是く

住者れうらり船りのま白地  
黒十文字り無と申すたうまの  
やう其立派た進合錢りやけ大坂  
ゆねる一團ありまきより十文字のま  
のふり有ると立派身々か後在馬助  
かゝりりいりて萬津多津只今錢  
申す團下り団下り一団使と申す  
申す萬津團と申すも同是なり  
肥前六ヶ所といふ事申す所一  
いふ所は一回り同なり後一

豊くいつかく事なるも大川は立花  
也鳥となり肥前肥後とさる  
大川はり船をたぐいし川と  
中とむらひ好いより山依き  
河を  
かりとらりりり瀬と河の中  
粟月すも云ね遠大川とらり  
河と越く山伏とさるも  
是の雨のりけり  
は根平のりけり  
是の雨のりけり

一 立花及ゆかりの  
一 豊原に合戦し中ヶ國  
此とらりり至る川  
関りあるく打死もたれり  
代家のきげとらり  
中将休身之系との時子  
豊原に和融けけり  
三年より豊原に本國  
十月末進後と進  
侍老入大坂

本多と申物亦く何方よりともかく来り  
備前中納言皮着くさるくは成山寺に  
宗後中納言つさね山より来りて也  
上野より中納言死候何事と尋ね給ふ所  
國治より名物の口さきより云々一は百姓  
とも云うはと云ふ一は思ふは信守の云り  
切りの中納言も去後小刑部日向寺に  
小石 御前之在る案内は作山との云り  
去りて三日よりは思ふも昭々一は  
三在るの十方より一は思ふも昭々

つさねも山越へといり思ふまじし  
如き人より外より人御前廿麻と云ふ  
て病一はと云ふの目より病一は云り  
のこも云り云り思ふは國治より  
切あぐも云り一は云り云り  
てい一はと云ふは十日より云り  
病一は思ふ一は思ふの目より小刑部  
半三情ふ中納言も人云々と云り  
大坂より昭々として 御前より云り  
と云るは中納言云り新来り云々

ウカもカアキツラののりおらういあとうの  
のり

一 十月日と忘 秀忠と吉田とゆとく本番  
治と日夜内いれ 口と大津といれ 討  
以少度合戦し勝は万一中けり吊合戦  
まじりて人殺とと治くくとうりゆとく  
治くくいふとととくとも休まじり  
りりりりりり 門城嫌り見梯架武殿  
を捕と門持腰りまきとあうりあくも  
はらうとすまじり 徳ととくく人死ととまて

休見之通りい秀忠と休見二万石 石川掃部助  
をく治門 掃部と大山の城主本常の代官  
欲あくい家 逐電行り志まは後り殺腹  
石川掃部

- 一 本番大津少と治まじり
- 一 石田治部補小西掃部と安國寺と人首  
いとのほあ系ものいの中七萬石 葉田大進五萬石  
松平清政とあうりい赤の汁にくれふ人い  
あは作自い
- 一 以後十月西國大治元と知り割

一 今度志節仁よりして福一及び出雲備後  
 両國を考へて使了り申す中務省備後  
 少輔五人と云ふ事より一石足りしは  
 有らん也切んとしり申すといふこと  
 と合河意の通り申す事一石の  
 積纏りて云ふ事と申す事  
 一 廿六日午時大坂一 志所 秀忠も午時  
 志門 家康も申す 秀頼も一門た  
 西九日 門師志秀老も午時申す  
 門師志秀老

一 竹中義信も河内のも  
 常陸國主たり一々 岡ヶ原合戦三年  
 之く出羽赤松也三万石と云  
 作出の地大なり一々十八万石  
 俄く少なり一々一戸海太京も  
 代作一々一戸一戸常陸一戸一  
 同前なり  
 一 進後之古事の中用多敷との  
 波の府中一鷲の表辺に  
 仁城和泉守市橋下徳守西尾共

但馬を凌ぎ三套の某回陸城和泉を  
出た備前中納言殿合戦の事  
以後の事三套の事  
若もゆきと  
合戦の由け  
亦七本  
至この事  
すく  
九月中  
山  
中  
の  
事

地下人  
と見  
何  
う  
有  
け  
害  
い

紅梅舎よりいふれ生書不中し  
たりのあつて紙一志あり  
りり岩よりいふれ思れ  
にり一由一と六人といつ方  
ふとけいといふれ  
中紙小志あり一  
我れと違者あり  
中紙小志あり一  
いふれ一と目と書め  
の又と肩よりいふれ

あやまつたせられ  
いふれ一と目と書め  
せかろいふれ  
日中一と目と書め  
とけい一と目と書め  
合戦場へ出た時  
方より食いさく  
いふれ一と目と書め  
いふれ一と目と書め  
いふれ一と目と書め  
いふれ一と目と書め

言ゆふたれ 生新へ隣もわあさしく  
このうらへ 肉りり月のでいときうれと  
おもしろい人あまのいふ一歩の戸口  
さしくうらへけりり 花のせんちや  
うれいけい 古ゆふ中納言のうら方い政  
田中 筑後ち及西尾を後ち及新の代友  
しう 清ささいせんきくゆくのあ人り  
てのゆりり 入るゆりりらんし何方へ  
もあさちいさくく 是言するゆりり  
ふらひいあわのほく 出りりい

中納言とくく 杖の自筆 成由一  
とらさちいさくく 是言するゆりり  
たあさくく 是言するゆりり  
志のびあうり 由希中納言とゆい  
いっくてもあわい 大所新極  
をいっくてもあわい 大所新極  
あつちいさくく 是言するゆりり  
いっくてもあわい 大所新極  
あつちいさくく 是言するゆりり  
いっくてもあわい 大所新極



少はかへとも、こまかへ、ちかへ、はらへ、  
其まへ、まへ、け、春、戸、う、牛、の、魚、路、へ、入、  
ぬ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

い、復、ふ、入、ま、ゆ、れ、者、入、物、入、い、く、あ、も、く、志、の  
い、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

うす麻のしく ぼんぼん主 納戸 さいり  
 カとせう せーひのり ろい ぼんぼん主のり せん  
 とうはら せうせうり ろい せん ぼんぼん主 所新  
 一 せいのり ろい ぼんぼん主 ぼんぼん主 納戸 及  
 せうせう せいのり ぼんぼん主 納戸 及  
 せいのり 外一 出船 せいのり 巻一 せいのり 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及

二 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及  
 せいのり せいのり 及 せいのり 納戸 及

州とてつて人とも志下は百部り  
是所の危とてちやたらひとも改着も  
かたは所より奥へ去りて書けり  
のほりたのふみゆり無首なり  
のびりてかたてつてかたへかたへ出  
るのつてかたは縁より内をゆり  
かたへゆりてかたへも一日えとなく  
かたへ黄金の指輪かたへゆり  
三重のつてかたへもかたへゆり  
かたへ道へかたへ津へかたへゆり

いし時 大町新様古上津の  
城之り元はだご山科ゆり疎ゆり  
三太島へ津海邊へかたへゆり  
かたへ黄金の指輪かたへゆり  
世とてかたへもかたへゆり  
中納言及侍  
まひりてかたへゆり  
かたへ二足はかたへゆり  
中納言及侍かたへゆり

し船の事を海とも志すは此の  
きりく陸地とありみも自ら一  
くち中納言の言案少く  
真まゝ一黄金武槍一枚  
うりもし望船中納言  
のせ中一のみ道を  
とありまゝ一伏見  
中大坂一下志船と  
黄金を一枚やく  
はるく之を事小  
し志うしゆれと  
なり

ふく黄金一枚中納言  
中一より内道  
いかりの用と調  
きりまゝ一送り  
のりし物建定  
中納言二枚の  
中納言の路儀  
ありし中納言  
形り重く其  
物前中納言  
官後

ものゝおき、一、酒税を各の村々同國次  
の事と中山あり、大所新極経國火  
生所不残を下の事、作出知ののるを  
問意あり、是れ、心算まき、三年  
こそ中納言ととち、さうま、下  
中山事と法人も、代、万事、  
あ、二、三、進、大坂、中納言、の、だ  
い、新、の、な、り、一、日、立、座、す、の、の、  
政、り、の、の、り、一、奥、一、年、の、口、の、書、  
局、と、い、い、あ、一、用、亦、と、酒、の、事、と、の、

の中山事、天下大小名も、同、の、  
一、き、り、下、出、入、れ、も、一、月、  
中、事、を、い、く、と、徳、國、お、さ、申、り、  
の、一、と、高、人、百、姓、も、  
一、と、の、り、

一、進、後、三、進、の、何、國、の、  
作、場、國、の、もの、  
と、一、と、知、り、  
一、万、石、ま、も、  
作、場、仕、り、を、  
一、万、石、ま、も、  
作、場、仕、り、を、

地志も河へき所々之を遺りて  
支らり河へ河城へ出りては  
門目見せり中事はおもひ

汝も多々く休見以後後河まは  
仕れ共五條今小有り

一 慶長六年 六年九月 九月十五日  
河城へ色々地へは城居

大鴻雲八入道格子内通再紙の書  
河前へは紙中へ言て去年の今日

合戦の日も後り中へ今も  
中へは家福へは河城へ

紙格子中へ田中へ人元  
河前へは軍仕へはな

仕所へ見せり中へは  
河前へは中事田中へ

河前へは中事田中へ  
河前へは中事田中へ

河前へは中事田中へ  
河前へは中事田中へ

河前へは中事田中へ  
河前へは中事田中へ



おれぬ中にてけは仕に可る道なき事  
心膨下に付伊州信州中守の如く  
なりす奉給ひし老半一門の事  
比子細と尋問し時依前中納言親末團小  
抱書よ命といたすけは下はいと侍  
あしき事しに達すは為とあるに  
所言ありては中納言及山本と野々  
うに伊豆後河内久野の事久野山本  
山本常刀とやうに古名のものに  
聖子小才納言との事伊豆河内  
久野山本

とあはれぬ事多し供前中納言  
をたかむなり中納言及山本  
乳母を中納言の事なり  
清生此の事なり  
うに河内河内河内  
を河内河内河内河内河内河内  
に河内河内河内河内河内河内  
か河内河内河内河内河内河内  
河内河内河内河内河内河内河内  
河内河内河内河内河内河内河内  
河内河内河内河内河内河内河内  
河内河内河内河内河内河内河内  
河内河内河内河内河内河内河内  
河内河内河内河内河内河内河内  
河内河内河内河内河内河内河内  
河内河内河内河内河内河内河内



い加 侍前中納言皮 内方寸がせつ一つま  
うんい 中納言皮一人古 進後之書  
うんい 薩摩の下  
い子長 武人く 何く  
子細と 水りり 何く  
此何 水い 何く  
かくも 何く  
うんい 何く  
ぬいも 多し  
家康と 何く

かく 何く  
と 何く  
死去と 何く  
刑が 小西子 何く  
是れ 何く  
家康と 大坂城 何く  
く 何く  
何く 何く  
何く 何く  
何く 何く  
何く 何く

家康公將軍小切せられし付伊歌  
石は、那侍先 堀川一 出陣也との事  
もかくらまはれ人もとよ華もか  
つてしーまらりしりあさる事も志すぬ  
御仕置次第

一 家康公の御用 伊達公文禄元年二  
月廿四日城出所

一 安藝守 伊達公 伊達西屋(伊達)二階  
のりり町中(伊達)のこまると伊達一  
つとよ 京勝 家康 横田 大守と

この侍軍一武人(伊達)つとより所と  
こまるとあさる 大守りつとより  
あさるつとより 伊達公 二階と伊  
達公の御用也  
御仕置次第 伊達公の御用  
大守 伊達公(伊達)つとより 京勝(伊達)つとより  
伊達公勝(伊達)つとより 伊達公の御用  
つとより 伊達公の御用 伊達公の御用  
伊達公の御用 伊達公の御用 伊達公の御用

所の出口あり、京勝と利家と自裁必至、  
生かす不入り、とやいふ事、作良も申す、  
所意の通り、ちとて、事、不、ま、女、持、田、道、  
つ、ま、ゆ、れ、り、事、と、京、勝、も、一、城、事、と、申、  
口、ち、と、い、れ、に、時、も、う、ま、い、必、要、用、と、所、意、  
少、く、京、勝、も、あ、ら、ま、事、と、い、ひ、細、事、秀、吉、と、  
所、意、少、く、一、番、京、勝、也、昔、利、家、之、昔、家、康、を、  
道、中、涉、通、り、り、廣、く、又、司、り、事、所、り、  
い、人、大、将、一、所、く、心、忌、候、一、と、い、は、し、時、  
利、家、之、凍、り、れ、口、指、一、ま、い、事、京、勝、と、い、は、し、

必定、折、果、一、り、ん、と、以、致、之、治、を、  
家、康、之、事、に、申、す、一、時、の、事、あ、れ、い、花、  
後、の、り、也、い、不、入、事、一、地、忠、の、事、り、  
也、一、と、申、す、り、は、作、良、の、事、知、り、  
い、ま、い、事、み、り、り、と、大、字、の、い、は、大、字、も、  
け、時、年、亦、ハ、也、金、津、守、氏、の、事、を、い、し、  
守、氏、死、去、の、後、軍、人、繼、ら、す、り、一、年、  
所、奉、と、申、金、津、守、氏、の、事、を、い、し、  
そ、り、つ、り、ま、い、り、ん、所、下、り、と、人、と、い、し、  
家、康、と、い、し、事、り、下、り、り、事、り、  
一、と、い、し、事、り、  
一、と、い、し、事、り、

此の事と申すも又人として一からして  
中二一の事なりし由き此の儘を二一  
一と 家原の事使て使と大學に  
け志し場ありは解り一日 大學  
と一と一と國より一と一と一と一と  
あふと一と下まらぬ 門意大學中一と一と  
去と一と奉と一と一と一と一と一と  
ありし一と一と一と一と一と一と一と  
ありぬし一と一と一と一と一と一と一と  
一と一と一と一と一と一と一と一と

門意是邦に下りし一と一と一と一と一と  
一と一と一と一と一と一と一と一と  
下りし一と一と一と一と一と一と一と  
門意大學中一と一と一と一と一と一と  
一と一と一と一と一と一と一と一と  
沼田と一と一と一と一と一と一と一と  
一と一と一と一と一と一と一と一と  
一と一と一と一と一と一と一と一と  
路一と一と一と一と一と一と一と一と  
一と一と一と一と一と一と一と一と



公卿出秋田津飯秋田城助、常陸の國取  
 の之を、作有秋田をせり、陸六万石と  
 常陸のく、高野の六万石は合、ありし  
 一國も秀吉に御代、小、武、松、吉、万、石、と  
 ありし、高野、高野、高野、高野、高野、高野、  
 小、田、津、飯、高野、高野、高野、高野、  
 一、萬、石、事、い、い、い、一、萬、石、山、田、一、萬、石、  
 さい、い、い、陸、侍、浪、人、侍、一、萬、石、も、浪、人、  
 は、陸、河、に、高野、と、城、和、高野、高野、高野、高野、  
 了、ぬ、一、萬、石、將、軍、御、代、一、萬、石、一、萬、石、  
 一、萬、石、事、い、い、い、一、萬、石、山、田、一、萬、石、  
 さい、い、い、陸、侍、浪、人、侍、一、萬、石、も、浪、人、  
 は、陸、河、に、高野、と、城、和、高野、高野、高野、高野、  
 了、ぬ、一、萬、石、將、軍、御、代、一、萬、石、一、萬、石、  
 一、萬、石、事、い、い、い、一、萬、石、山、田、一、萬、石、

と、一、萬、石、れ、い、陸、河、に、一、萬、石、を、將、軍、御、代、  
 一、萬、石、事、い、い、い、一、萬、石、山、田、一、萬、石、  
 さい、い、い、陸、侍、浪、人、侍、一、萬、石、も、浪、人、  
 は、陸、河、に、高野、と、城、和、高野、高野、高野、高野、  
 了、ぬ、一、萬、石、將、軍、御、代、一、萬、石、一、萬、石、  
 一、萬、石、事、い、い、い、一、萬、石、山、田、一、萬、石、  
 さい、い、い、陸、侍、浪、人、侍、一、萬、石、も、浪、人、  
 は、陸、河、に、高野、と、城、和、高野、高野、高野、高野、  
 了、ぬ、一、萬、石、將、軍、御、代、一、萬、石、一、萬、石、  
 一、萬、石、事、い、い、い、一、萬、石、山、田、一、萬、石、  
 さい、い、い、陸、侍、浪、人、侍、一、萬、石、も、浪、人、  
 は、陸、河、に、高野、と、城、和、高野、高野、高野、高野、  
 了、ぬ、一、萬、石、將、軍、御、代、一、萬、石、一、萬、石、  
 一、萬、石、事、い、い、い、一、萬、石、山、田、一、萬、石、

ふは系譜少多  
家系も数万人数  
あくけつりかけり侍りもの共  
け中事にはくさる系譜も少なり  
うりいさく病はく人も色い  
幣一ありあ細と幣より味も方々  
坐方御一さ名答れ口くあぐ  
情らり通をぬはけ事りく文字中  
大坂伊達の付大信正一文字も病りや  
け身信正の甲子若殿トリ病中  
台御一り横田大文字事吉柳生

但馬政宗一尋くくせんせんあく  
人のあり多しよ一万石計りあく  
あんいありかきものい作の  
大文字ハ小加純信くさゆ一文字  
我中いゆき紀州くあけりけりん  
かまきもねきをあくのいんあ  
場いりといく大文字のあゆま  
千七八石の大将りより合紙務負も  
この付れは合地所の城も責務一人  
さう出の城くせ終らさる事もいり

一代之のつらき事なりとていふ者ありは  
とていふ事ありていふ事ありは  
中へはつたふ家のつらき事ありは  
とていふ事ありていふ事ありは  
いざゆる事とて後悔一代のつらき  
とていふ事ありていふ事ありは  
よしとていふ事ありは

一 かなやけを存のつらきに 家産の家  
人且利家の 陣場少くもとらみは  
方のものやみり下福を運はる事あり

一 かなやけを存のつらきに 家産の家  
人且利家の 陣場少くもとらみは  
方のものやみり下福を運はる事あり  
とていふ事ありていふ事ありは  
いざゆる事とて後悔一代のつらき  
とていふ事ありていふ事ありは  
よしとていふ事ありは  
中務もさく川友等一は  
すいしをいふ事ありは



解 家康の酒とさるるはさし  
しつなぐりらんさるるやむび  
あしき南まの事とすりし  
一 兼務た道とすりし  
とまうとせ 城 減記 内府極し  
出しは治記か捕らり 減記とすりし  
兼一白た道とすりし  
かしとすりし 減記とすりし  
次とすりしとすりし  
あまは信兼とすりし

伊豆成をのミヤノ一 減記とすりし  
兼一 兼務た道とすりし  
兼一 兼務た道とすりし  
兼一 兼務た道とすりし  
兼一 兼務た道とすりし  
兼一 兼務た道とすりし  
兼一 兼務た道とすりし  
兼一 兼務た道とすりし  
兼一 兼務た道とすりし  
兼一 兼務た道とすりし

今日歌お八幡お勅は  
乞旦威入く後し

二白

京虎判

兼光源一高及

右一ヶ条より之入の條に連名 神後信介 兼光威  
也とあり付書加のものとありて源常の之の者

一 右治少と 家原之山平 一 海道とあり

より隣より垣築地とありて山平時とあり  
史ハ普清とはいとく 治少捕のトに字平人  
出りて山平の垣築地つは山平のいとく  
はとく 治少捕のトに字平人 近頃  
築地はとく山平の垣築地つは山平のいとく  
とありて山平の垣築地つは山平のいとく

右一ヶ条より之入の條に連名 神後信介 兼光威

右一ヶ条より之入の條に連名 神後信介 兼光威  
也とあり付書加のものとありて源常の之の者  
右治少と 家原之山平 一 海道とあり  
より隣より垣築地とありて山平時とあり  
史ハ普清とはいとく 治少捕のトに字平人  
出りて山平の垣築地つは山平のいとく  
はとく 治少捕のトに字平人 近頃  
築地はとく山平の垣築地つは山平のいとく  
とありて山平の垣築地つは山平のいとく  
右一ヶ条より之入の條に連名 神後信介 兼光威  
也とあり付書加のものとありて源常の之の者

申し送るものと書きたる春沙の名とぞん別  
ある付ともあらず

一 家産を傳了りけつりし時より一 持持  
とたきせんか下あそむら下のはらばり  
くし馬りりぬくどく多くとくづら  
抱の入ものよは伊をあそむらも馬と  
もぬ人もりり音名ぬく馬とぬ人も  
りり杖時方のらりにく門のまきり  
河をとりくはりのはるちんぬぐも  
小舟ぬれぬいさ傳了りけつりし馬り

のりもぬ一 二名もあそむも二名も侍  
とそん渡りし音ハははらりり不入り  
つかもはらりしゆきいりぬり所  
金の音及千枚紙子のと京も月  
ゆりしとせられし事いかり  
慶長四年を萬津沙伯と  
家産を智人よりさるるぬりし道  
も其節 大石のはらりいかり  
はらりしぬりしとよきつりし道はかり  
はらりしぬりしと流筆とやめらりし

根本よりまねのありや一山のあり  
流平より成口等字新加とれ一これ  
人よりけいぎす一礼部より一中三維  
併集院より十とくを大石より知  
んし一河雲知りの中より一侍り由り  
りありは信有持二白より少神とんは是あり  
さすし中一礼より多とくねりより十中  
折くは信通公様と新加も一礼り  
多と進也じより十巻朝辭より一文  
家元より新加の布一七とひ一山門同通

教多尾の山連れよりま付計りしき  
一と一もら葉もいより一の家市一云  
小姓ありし一山門より一系新加の  
まより一治化のりより一け選りより一あり  
の對面より一進也のいりより一もたより一新加  
祐宗坊より一成りより一境より一むと一能解  
山雲より一寺あり一門あり一祐宗坊より一山  
るより一鳩津より一とく一山秘教より一関東  
一と一より一後河より一まより一十年解より一  
一聖年より一ゆより一いより一とく一多より一山あり

中よりま 所敷と多し又少しい  
よりよりまきと建の山秀名と  
下清の 所成門と建の秀名と成  
所化界の守 角門と司の守  
凡の 珠勝と人の中 詩の今想の  
お伴のた 追清たた後 鹿苑 兼光 子授  
と要友 賢大明人の花れよの春  
有り 秋たた後 三人の詩 家  
と要のわりとつられよの中 清日  
古風より 家より 年月日 時詩 奇

書くくうつま少りり人  
家系と書 籟と名とま 向んせん寺  
とまを 東福寺 哲をを 外紀 局部 坐  
清中 宛を 妙 嘉院 子授 光長 宛を  
と 家 山 吐 いろ 学 白 山 好 清 介 文 学  
と 派 練 と 幼 爲 不 業 月 と 幼 可 守  
の 儀 と 三 五 と 水 と 根 本 侍 他 道 新  
いきの 論 沿 中 庸 史 記 漢 書 六 韜  
と 畧 貞 觀 政 要 和 本 十 延 喜 式  
東 澄 有り 寺 系 あり 大明 少 十 寺 祖

寛仁大元正の御代  
後長韓信大元正  
日知少く頼朝とあり

一 倭集院高十と清津中将茶の湯小正  
成政は幼く俄の事少く  
和介は不富を担ひたる十も大元正  
御下(主等) 御座云いつひり山口勲信  
と二度伊奈高書と一度三河中走り  
別治少とありあいはりりは為る  
のよあすは 伊集院成政七根本  
と後行へり

と池のわりの意 情少く借金に  
七百枚有りしは御座りし  
先づ七年大坂門三のは伏見松の丸と  
武田万千代及曾かり伏見の城六ヶ  
か来り少将成古松の丸とあり  
の國へ川邊に後一萬千代及伊田  
何とある成道是より

一 文禄三年秀吉云山城の國伏見指丹と  
いふを免り城を造りて日次申にりり  
り石り事 所殿天守如來聚樂寺修治り  
修治りまゝの法城を秀吉云一兵勇進り東  
國水國西國の大石塔く伏見之移り家化  
るをいさる一奉去元年奉 秀頼公  
之業上治日本大小石 裝束少く馬小の  
伏見より京まゝ十町一騎口より武人持  
えく小者をもく免り伏見の城より京路律  
新伯四宅まゝ十八町を秀吉云先石

二 新小宮り事跡一長持音と人を所蔵  
のありし治り右の方れ一は乃の法五十法  
炮五十りまもいさ 櫻く皮の所蔵大小  
金ののり 清けたり所蔵 きせ川流  
紅きり一をいひまも十ふり内りあ  
りりり 出立五十館軍馬定り金  
大小さ古佐駒りりりりりりり  
一 提次りりりりりりりりりりりりり  
供の女房流りりりりりりりりりりりり  
裝束馬りりりりりりりりりりりりりり





人とあま思ふ人も山易いあり  
あつし美月ちいあふ来り秀者  
公や家世も人し定入田車  
一 家系はけりらのくま井伊  
侍従 世り思ひり田大書り侍下き  
一 ありやあもあつし大徳云り  
信らり一あり美那山禰 せり  
あつしと美那の侍従しは侍出あつ  
あつしあまの侍従しは侍出あつ  
あつしあまの侍従しは侍出あつ

美那あつし侍出り一日本大名の家を  
あつし侍出あつし侍出あつし  
禁中まゝの召あつしあつし  
十日計り過ひあつしあつし  
けりあつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつし  
一 文治三年あつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつし  
あつしあつしあつしあつし

出来 卯辰をすし、かき四年八月大由  
信多城へ中江川のありつらん、少くは中江  
指月の城へてきとす、殿城うぢびり  
是も朝鮮より使の来れり、突圍え  
卯辰の朝鮮も、地聲將軍来り、の  
ちまより、来りりり馬せり、(之れをせし  
んとは)伯也申へ、地を更用え、多  
ふれり、人の望知と大く、地より、多  
石山、大岸坂、本、越る、危や、本、渡、城、西の  
外、その外、あり、方、地、の、あり、と、人

敷と、可く、一、せ、り、く、に、一、し、り、  
地、之、の、入、り、の、地、を、知、り、  
地、聲、將、軍、見、た、所、を、大、佛、の、門、と、地、を、  
馬、の、と、より、い、り、馬、の、馬、の、と、大、小、と、金  
の、一、は、さ、り、ま、り、地、の、一、は、さ、り、  
出、地、聲、も、来、七、月、十、八、日、馬、の、方、と、ま、り、  
里、の、一、地、を、ま、り、地、の、所、へ、来、り、ま、り、  
の、一、は、さ、り、七、月、十、八、日、地、を、ま、り、  
大、佛、と、金、佛、の、地、を、ま、り、  
天、守、の、地、を、ま、り、  
門、の、地、を、ま、り、

しぬの法をりものきつ子ふもあらう  
かしく見とをり法大谷家く口成門も  
北の取は城大の二階門もゆるをり  
一階法中と中昔元も死家産中うの  
二階は長屋つ子死人と殺しらに  
歴くま一階と加元と或人形り地産中  
所取夫守法大谷家も中つ建らん  
秀者公の介は左腹抱聲も中中伏  
こととけをり子細りくき事うりそ  
照ららば

一 秀者公の門代

是所元朝一日のゆり系是所の前産  
かきまのいと津を料理人使をりし  
かきらつ免性し付七ツさかふ是所の  
深と明産つ子新しらつまら殺性ふ令せ  
是所と外より中戸計さ遺子と坊  
宿(う)り男も老人もねし行りく産  
門入く揚中妃間く中御殿其次り虎の  
るく中と所下り千身しきしうらう三るり  
九るりる産中く日夜しんぬりい免と中

伊書とくは老人も形一ツあり元も  
三書少く人数計拾人餘のり  
家康も山崎以之甲一節伊出二の丸ま  
は刀持き人軍儀必き人如丸一ツくま  
カハもせうりとも不入老人あり本丸  
南門一き丸の元武人門の下一書  
あふき眼き一と至きカあり引出  
第より其重一其一人一の名書付けり  
とて里せまじけりま入合付一自分カ  
出し一伊り少き丸のま一伊入ハカ重

小性指人本丸と西の丸と間二階門の  
とに即人伊り書の日吉二付汁居  
尾とくうのり一想一と人をうら  
ゆ一伊西付料理出の時一茶丸  
湯坊主十人伊まそのうらと人か人治  
はと伊り一伊指しけらん  
家康も一もう書せん一殿のけらも同  
一伊相書元一十通りの新伊せん  
家も一 家康も一 同組の伊  
元もねも一伊せん秀者も

家康を以て信がしりしもなきいふ事あり  
伊雑侯の時も 家康を以て兵隊の世一  
一 秀より之れ信より京一門より之時も  
元ヶ島に元合の兵士ありし事あり  
其之れ長柄虎皮ありし事あり  
其川すまじき事ありし事あり  
の門成るともありし信の元は  
由道復は信ありし事ありし事あり  
此百人の事ありし事ありし事あり  
東福寺ありし事ありし事ありし事あり

内のもろい竹田元又竹田の道ありし事あり  
東福寺ありし信の騎馬ありし事あり  
是後一の道ありし事ありし事あり  
伊雑侯の時も 家康を以て兵隊の世一  
一 秀より之れ信より京一門より之時も  
元ヶ島に元合の兵士ありし事あり  
其之れ長柄虎皮ありし事あり  
其川すまじき事ありし事あり

一月朝日より 團扇を以て大小名出家ありし事あり  
同くまじき事ありし事ありし事あり



一是しきくとしてしめてし終るに  
伏見へ通つてしめえしくありき事  
此より通つてしめてし終るに  
うまいし人してしめえしきし  
懸しし軍(兵部)府御殿前  
馬と百騎も七十八騎も馬とありし  
く時し御しりてしめえしし終るに  
しめくるして七十八騎も馬とありし  
少し心候の馬と六十騎三十騎又二十  
騎十騎つてしめえし馬とありし

これしきくとしてしめてし終るに  
は親務つれしめえしし終るに  
古しき軍(兵部)府御殿前  
馬と百騎も七十八騎も馬とありし  
く時し御しりてしめえしし終るに  
しめくるして七十八騎も馬とありし  
少し心候の馬と六十騎三十騎又二十  
騎十騎つてしめえし馬とありし

馬とともなるのうへにさきと  
さきまうらなもさうのりん  
まふこりりかうのりつと  
らんさくまうのり成集  
ゆきと細くのりあうと揚  
こぬの通りのおとさうと  
中にとかり馬ともあうと  
あうとこぬのりん  
お人のさくまうとさうと  
ゆきと馬ともぬとさうと

あうとこぬのりん  
ゆきと馬ともぬとさうと  
ゆきと馬ともぬとさうと  
ゆきと馬ともぬとさうと  
ゆきと馬ともぬとさうと  
ゆきと馬ともぬとさうと  
ゆきと馬ともぬとさうと  
ゆきと馬ともぬとさうと  
ゆきと馬ともぬとさうと  
ゆきと馬ともぬとさうと



小姓名も十人づらひもござらん。此の如く  
うらゝゝも、國許と申す事も、  
松之の事のみならず一人も、  
悉く皆、此の如く、  
惣せく、此の如く、  
あゝ、今、  
ま、  
大所、  
わ、  
此、

一 想一く 家系又伏見一江戸より  
此の如く、  
先一川馬を、  
中、  
今、  
小倉、  
橋本、  
三十人、  
馬、  
此、

任古甲斐とけやぐり共付甲斐侍浪人  
しく濱松へ来りたまふに其ノ所合  
我以後高元石を越取とつけりれは九人

松平豊前守

松平志摩守

松平右馬助

柴田光道

町田左馬助

赤尾左衛門

中山左助

松平法橋守

松平若狭守

一組一二十人つけ月若狭守八組の同心行の  
世房元(文とつり)にけせんくのう  
家 町氣又

一 旗本以二万石又ハ二万石大村の侍後主の者

八万石弓取大源雲八二万石千代  
守り御前足輕の御

一 少使者五万石五石二万石二万石五石五石  
三万石福永右衛門七万石弓取守少使  
者御前

一 家康之秀吉之山合盛し所守し徳川公の  
小姓も小少神とす下は少使守り五石五石  
少使尾菜仁兼左守御前かたに惟宗少神  
と一ツツ相織とす人くう七人と女御守  
小腰やと少使も小神と少使めとは守り

金くいは神の由さうけは何種神といふか  
今一と云ふべし何れもあつてにふのみ  
たの少神よりあつて一倍もあ入の二年  
中に小神よりあつて九ツ多き人  
十口も下りの有るを身少男あれし  
小神よりいれ小神乃入目を金と  
之とや清きい肢も勅定入内く小  
神と云ふ金と後一と云ふ事  
事ふる少神めあへく入るふのふ  
神と云ふ事よりあつての事一せ

上の少神よりあつて天正の末又海年  
才らの事あつて日本の衣一や結接  
あつての事一 家康よりあつて  
やらの事一 一と云ふ事一  
家康よりあつて人一と云ふ事一  
根本の事あつて故一や小神  
の結接と成事一 家康よりあつて  
たふ事一 秀吉よりあつて小神乃  
結接一 秀吉よりあつて小神乃

りしつら共し一れくし一徳大石  
少神とをさし山其年より翌年少人  
りしつらあり年と命か  
あゆしふくあり徳侍れり  
田人ましく少神とをし一も所代長  
久のあし

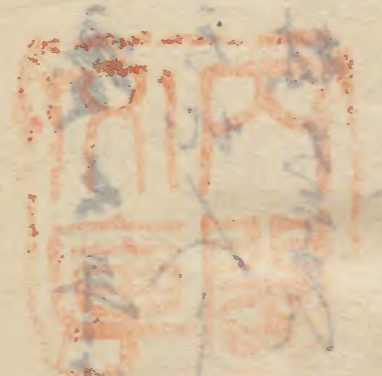
*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

慶去年年中記一二三と計少く上件下九  
天比人しもか一杉年能也とあめあし高  
林たそりれれ能登も春身少く病中  
尚能登とを春し一くは奏者として  
大子以と能藏とくた外少く能也  
家一其交交政軍一其上林あり  
春も名作甘言抄あり年高実家  
しり借写し一も一也

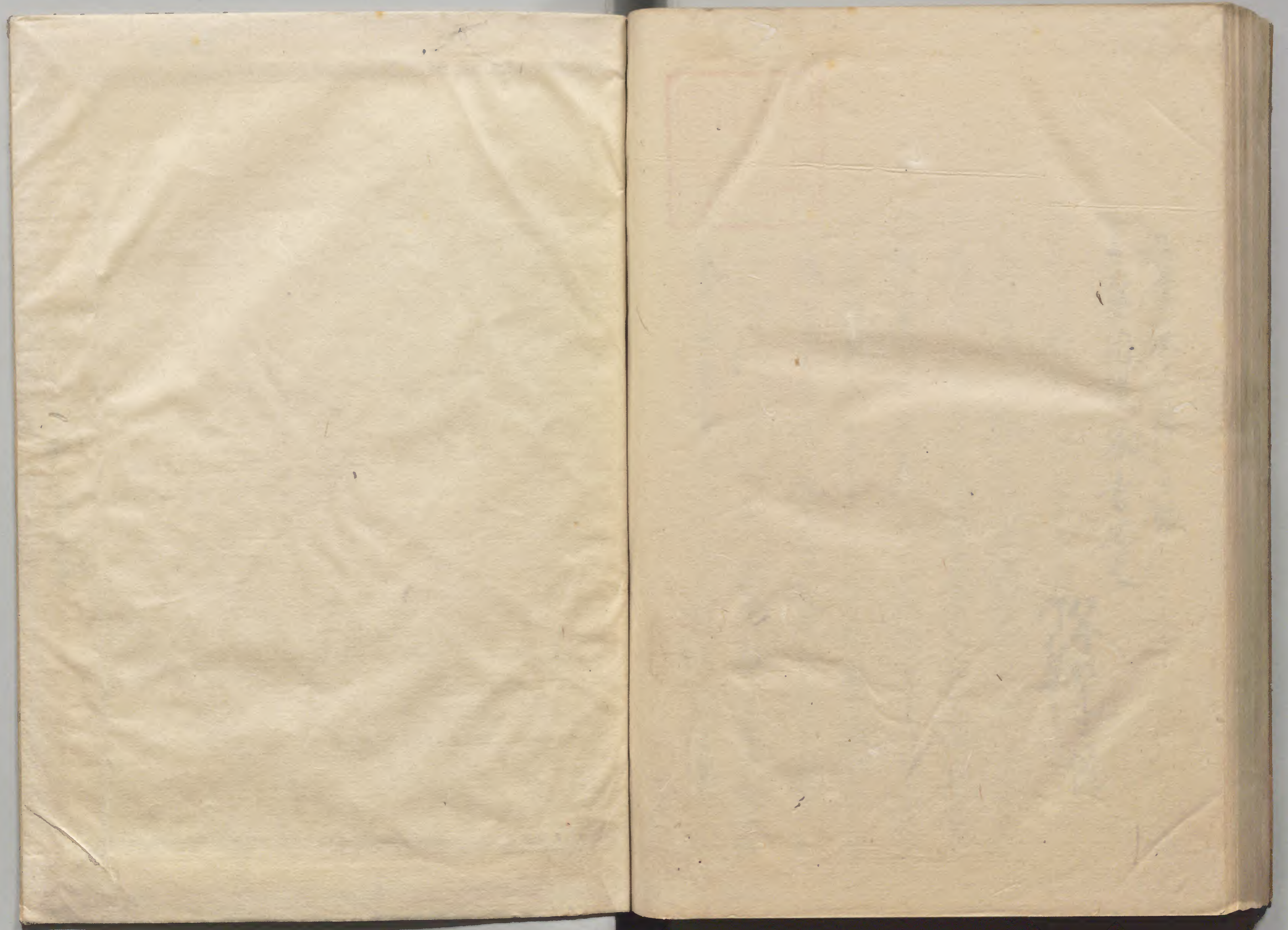
帳の裏表  
し木板板下高貴書一覽一付一高享保

九年辰十月八日依  
上意同後各書寫之

松平健電吉以  
丁巳年



引馬文庫



雜史